
うちの子変化

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うちの子変化

【Nコード】

N7932R

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

ある日を境に芦田萌音^{あしたもね}の私物が擬人化して

！？

擬人化

彼女、芦田^{あしだ もね} 萌音の家では、普通では非日常のことが、日常のように行われていた。

「あ、烈火くーん。お皿とつてえ」

「はい、お母様」

赤髪のチャラそうな彼は烈火^{れつか}。

元々は赤い小さなひざ掛け毛布だった。

「ママさーん、お腹すいたあ」

「あらあ？どうしたの？ご飯まだだからまっててねえ」

この小さな子は夢斗^{むと}。

元はオレンジ色のふわふわクッション。

「ただいまー。買出し終わったよ」

茶髪の彼は宗^{そう}。

元、茶色いクッションだった。

「おかえりなさい。あら？萌音は？」

「見てないですよ」

と、飛びついてきた夢斗を抱き上げながら言った。

「それにいいのよお？敬語じゃなくても。」

「いえいえ」

彼らは何かの力でこうして生きているのだ。

萌音が起床すると共に三人は人間と化す。

そして、この芦田家は布団制なので、

誰かが布団を敷いた時点で三人は元に戻るのだ。

もとに戻ってもなお、話は出来るのである意味便利(?)だ。

「ただいまあ」

と、萌音が言うと三人は準備を放り投げて萌音のもとへ向かった。

「おかえり！もーちゃん！」

「むーちゃん元気だった？」

夢斗の頭をなでる萌音。

「おかえり。今日の晩飯はなあ」

「知ってるよ、烈火。グラタンでしょ」

チエ、とぼやく。

「おかえり。」

「宗。ただいま。」

この三人の名付け親は他無しの萌音である。

「ねえ、もーちゃん！お買い物連れてってよお」

「やだ。だって途中で寝るじゃない」

「ねーなーいーかーらあああ」

「じゃあ明日ね。お休みだし」

「俺らもついてっていい？」

烈火が便乗した。

「ダメっていったら？」

「泣く」

「子供か」

まあいいけど、と仕方なく呟く。

お買い物

翌日。

三人（実質二人）が駄々をこねたせいで、萌音^{もね}は三人と買い物に行くハメになった。

「もーちゃん。とおいーだっこおー！」

「もう、そうなるから嫌だっけ言ったの。宗と一緒に帰ってもらおうあ？」

「歩く」

「子供か」

しまった子供だ！

我ながら子供に何を言ってるのか、と反省する萌音。

「というかあんたら買うものあるの？」

「ねえよ？服とか欲しいと思っちゃったりしちゃったりいと烈火。」

貰い物では嫌らしい。

「贅沢言わないでよ。結構高いの？」

わかる？お母さんがくれたお金だっけ三千元。三人でよ？すくなっ！」

「??？」

金銭感覚はわからないのね…………

数分経って、ショッピングモールについた。

「ふえーん、もーちゃん、抱っこー！」

「宗にだっこしてもらって」

「うえ…………、そーくん、抱っこ」

「はいはい」

「あ。あつた」

萌音が真つ先に行つたのは雑貨屋。

「何か買うのか？」

ひよい、と何処と無く烈火が現れた。

「うん・・・ってええ！？烈火いつのまに！？」

「驚きすぎ」

「そ、それより宗たちは！？」

「コミュニティ広場で休んでるよ」

「あ、そ」

馴染みすぎ・・・

「で、それ何？」

「これ？えつとね、友達からオススメされたものなんだけどと、レジに向いながら言つた。

「ミサンガつて言つてね、切れると願いが叶うんだって」

「へえ、切ればいいのか？」

「人為的にじゃなくてね、自然に。昔結構流行つたんだよ」

「105円になりまーす。うふ、君彼氏い？結構イケメンだねー」
店員のお姉さんが話しかけてきた。

こういう人嫌いじゃないなー

「違いますよ。」

「あ、そー」

「安いなあ、あ、じゃあ、このお菓子セットください」

「まいどおー、君可愛いからおまけしちゃうね、400円！」
表示価格と100円もまけてくれた。

「ありがとうございます」

「もーちゃん！そのお菓子なあにー？」

「むーちゃんが愚図らずにちゃんとおうちに帰ったらあげるよ」

「ほんとに?!じゃあ僕頑張るね」

そこで、「ああ」と何かを思い出したように宗が話し出した。

「さっきそこでフリマしてたぞ。結構いい服もあったし、安いから行ってみないか?」

「ほんと?行く行く!」

旅行

「いっぱい買えたね」

と夢斗が言う。

「そうだね」

「おい、お前も持てよ!!」

烈火が言った。

「嫌だ。重いもん」

「なっ!？」

そんな二人を萌音がなだめた。

宗は嫌な顔せず、（結構な量の）荷物を運んでくれた。

烈火と夢斗が一番の問題児かな。

と萌音は思った。

家に着くなり、兄の淳平が車に荷物を運んでいた。

「あれ、なにしてんの？」

淳平は「ああ？」と機嫌悪そうに答えた。

「旅行だよ、旅行！ほら、前話しただろ！？田舎の山奥にだよ！」

「なんでそんなに怒ってるの？」

「るせえよ！おめえらがいねえから俺一人でやってんだっつの」

「ああ、彼女さんと遊べないからああ」

「ぶっ殺すぞ、オルあ」

萌音はキャハハ、とせせら笑った。

準備も終わり、夜の七時を回った頃。

「さ、行くわよ」

「夜だよ!？」

「遠いのよ？だって九州にあるのよ？」

「遠っ！」

一日かけて車飛ばすわ、と母が言う。
運転するのは父だろうに。

「さ。三人も入って。」

「え、俺らもいーんすか？」

何言ってるのよ、と笑った。

どうやら、ずいぶんお気に入りらしい。

「うわあ」

萌音が一言漏らしたのはそれだけだった。

目的の村はもう少しだ。

綺麗な小川が通り、周りは山々が囲むこの大自然満載の村。

一度人間なんて住んでいるのだろうか、と萌音は思ったが来る間一人二人と人を見た。

「あとちよつとで着くわよ」

母が唐突に言った。

「ホテルだけはしっかりしてるの。綺麗よ」

まるで来たことのあるかのように言う。

彼女に言われたとおり、確かに綺麗だった。

意外と観光客もいるようで、なぜか萌音は安堵した。

「部屋は三階の306、307、308号室ね。」

「はぁーい」

「あら、間違えたわ。6、7よ」

「紛らわしい」

「何？」

「なんでもない！」

しまった、つい心の声が。

「午後まで暇だからそこらへんで遊んできなさい、子供でしょ」と言われたのでホテルから出て遊びに行った。

「あれは【邪魔だから出てけ】って言ってるんだよね」

「俺もそうとった」

「宗！」

ニツコリと彼は笑った。

「女の子一人で出歩かせちゃダメだろ？」

彼は昨日買った服をモデルのように着こなしていた。

まあ、比喻なんだけど。

「紳士さんね」

萌音は「ふふ」と微笑んだ。

ホテルの窓から「萌音えええええ」と烈火と夢斗が叫んだ声が萌音の耳に届いたが、聞かなかったことにした。

旅行（後書き）

注意されたので、一応気を付けて書きました

旅行2

「あれ？それ何？」

「地図。まあ、こんなところで迷うことないと思うんだけど、ね」

確かにね、と相槌を打つ。

ガササ、と茂みが揺れた。

「うわっ」

と声がした。

「？」

「と、都会の人間だ！」

「人を化け物みたいに言うなよ」

「喋った！？」

「喋るわー！」

そこには、タンクトップで短パンの男の子がいた。

九州だけど、寒い。

「さ、寒くないの？」

「はん！寒くねーよ！」

「ふうん」

萌音は本当に興味がないらしく、

「宗、行こう」

と言って少年を無視して行こうとした。
が。

「待つてよ！都会話聞かせて！」

と呼ば止められた。

正直外に出てる自体めんどくさかったので話なんぞしなくなかった。

「嫌だ。早くホテルに帰りたいのに、追い出されてるんだから」

「？」

「お、おい、萌音。いくらなんでもきつくはないか？」

「いいの、いいのー！」

強引に宗の手を引きつつ早歩き。

「待ってー」

と、ついてくる。

どこかで……、あ！

「どっかで見たことあると思ったたら劣化と夢斗を足して二で割った感じの子！」

宗と萌音がもった。

「……………」

少年は何を言ってるのか全くわからなかったらしい。

まあ、それはそうだろうけど。

「なあ、お前の着てるこれなんだ？」

「お前じゃない。あたしは萌音！」

「……………これ、なんだ？」

「……………はあ。これは、レギンス。“着てる”じゃなくて“履いてる”ね」

「違うのか？」

全く違うじゃない！とキレ気味に言っただけでも、わからない素振りを見せた。

しばらく歩いていると、夕日が沈むのが分かった。

「やば、六時」

「ん。そろそろ帰るか？萌音」

「そだね」

しゃがんで小さな花を見ている萌音に宗が言った。

「なあ、兄ちゃん、姉ちゃん。明日も遊ぼう？」

「あたしの家族のちっちゃい子と遊んであげて」

もううんざりだよ、と言うかのように言葉で少年を払いのけた。

「やっぱり、きついと思うんだよ」

と言う意見に沈黙を返す萌音。

そして、ボソツ、と言言った。

「あたしは宗とふたりでに散歩したかったのに」

「何か言ったか？」

「ううん、何も」

作り笑顔でそう応えた。

旅行2（後書き）

連続しません

前に戻ってる気がする

旅行3

「おい！萌音！お前宗とどこ行つてたんだよ！！」

「散歩だよ」

「俺も一緒に行きたかったのに！」

「そんな子供みたいなこと言わないの」

と言つて部屋に入ると烈火が後ろから抱きついてきた。

「子供でもいい。お前と長く一緒にいたいんだ」

「……………ッ！」

萌音は真つ赤に頬を染めた。

そして、烈火を廊下突き飛ばし部屋の鍵を締めた。

「どーしたの、萌音ちゃん」

「……………、なんでもないよ。ごめんね、ひとりにして？」

「うん、いいよ」

「烈火、萌音ちゃんになにしたのー？」

「……………何もしてねえよ」

「本当は見てたんじゃねえのか」と烈火が問うが、

夢斗は「見てないよ」と微笑んだ。

「あー、そ」

「うん」

「なにそれ！？結局三部屋とつたあ！？」

「そうなのー。だって、

『奥様綺麗ですね。おまけにもう人部屋半額で貸しますよ』って」

「最初の一言か・・・」

萌音はそうつぶやき落胆した。

「それとねー？よく聞いたらお布団じゃなくてベッドだったらしいのよ」

「！？」

「萌音ちゃんたちおんなじ部屋だから、仲良く寝てねえ？」

「ちょ、お母さん待つてそれ！」

直訳で「男三人と旅行の間一緒に寝ろ」っていうの？！それにベッドだったら、彼らがもとに戻らないじゃない！萌音は更に顔色を悪くして部屋に戻った。

「ありえない。悪夢よ、これは」

「もーちゃん！ランプしよっ」

「ランプ？持ってきてないよ」

「おじさんを買ってもらったんだよ！売店で」

気前のいい父だった。

四人で大ランプ会を始めた。

「ダー！また負けた！」

「へへーん！烈火弱っちー！それにしても宗くんつおいよね」
宗のあぐらの中にちょこんと座っている夢斗が言った。

「そうか？だつてお前の見えるし」

「ずるい！」

「なあ、萌音。お前もここに来るか？」

と自分のあぐらを指さす烈火。

「なっ!？」

また真っ赤になった。

そして、

「何ふざけたこと言うの!」

「ほんとだよ! もーちゃんは僕のためだからね!」
と、夢斗が言った。

「んだと、てめえ! ガキのくせによお」

「べー、だ!」

転校生（前書き）

人物：

・ 芦田あしだ 萌音もね

主人公。

・ 夢斗むと

クッションが擬人化した男の娘。

・ 烈火れつか

ひざ掛け毛布が擬人化したちよっぴり不良な子

・ 宗そう

クッションが擬人化したしっかりもの。

・ 園田そのだ 美恵子みえこ

萌音の友人。

転校生

旅行も終わって、無事に私たちは家へと帰った。

「うつわー、久々！シャバの空気つつーの？」

「烈火、変な言葉使うなよ」

「チエ。それだから、ユートーセーの宗君はよお」

烈火と宗が口喧嘩を始めた。

いつもより軽い。

何かスツキリしたのかな？

「おはよ」

「あ、萌音！やっと来た！」

「どうしたの？」

萌音が問うと、転校生が来てたらしい。

別にどうでもいいんだけどな……

仕方なく友人に連れられ、転校生のもとへ向かった。

「美恵子お、別に見なくてもいいよお」

「えー！見ときなさいよ！結構イケメンだし！」

美恵子のイケメンって信用できないよー、などどつぶやきつつも引
つ張られる。

「ほら、見てみて！麻生くん！」

「あ、園田さん」

「何？もう知り合いなの？順応早くない？」

ボソ、と突っ込んでしまった萌音。

イケメンを前にして緊張している美恵子が、萌音の手をつねり始めた。

正直痛いので、無理やり解いた。

「えーっと、はじめまして？ 芦田萌音です……………」

「あ、君が萌音さん？」

「？ はあ」

曖昧な返事を打つ。

「つか、なんで名前？ 馴れ馴れしい……………」

「美人で有名だよな」

「それは、偏見かな」

即答だった。

「ね、どうだった？」

「別に？ タイプじゃないかな」と、言った瞬間。

萌音の脳裏には三人が。

……………。

「まあ、いつか」

「えー、何？ どしたの？」

「なんでもなあい」

三人

「好きな人、かぁ」

家に帰った萌音は美恵子の言葉を思い出していた。

「いるのか？」

「別にいないけどさ、

気になる人ならー……、って、えええええ!？」

振り向くと烈火が。

「ののののののノックしなさいって!!」

「したぞ？手が痛いぐらい」

確かに烈火の手は真っ赤だった。

やば、聞こえなかったなんて言えない……

少し反省する萌音だった。

「ところでなんの用？」

「ん?……いや、ちょっと別に、何もないけど」

「なにその日本語？」

「だって、イケメンの転校生来たって言うから」

「私言っただけ!？」

ガタン、と真っ赤にして立ち上がる。

「い、いや……」

それに対して、

本当にびっくりしたらしく烈火は一步下がった。

「美恵子さんから聞いた」

「なんでお前がそいつを知ってるのか」とツッコミを入れようとしたが、

いちいちめんどくさいので省く萌音。

「何？やきもち？」

「ち、ちげえよ！」

今度は烈火がいきなり真っ赤になって立ち上がる番だった。

「でも、大丈夫。私は三人が一番好きだから」

「俺じゃなくて？」

「独り占めはもったいないじゃない」

ニツコリと微笑んだ。

告白

「ごめんなさい」

今日、萌音は例の転校生に告白された。

「私、好きな人、いるから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そう」

「あ、だけど、これからも普通に接してね。

私の好きな人、いついなくなっても、

おかしくない、し・・・・・・・・・・」

あれ、何言ってるんだろ・・・

「ごめんね、じゃあ・・・・・・・・・・」

と言って駆け出した。

それからは、授業も部活も何もかもサボった。

「ただいま」

「あれ、萌音・・・・・・・・なんか早くないか？」

一番最初にあつたのは、宗。

「全部サボった」

「はあ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして脱力してそのまま玄関に座り込む。

「お、おい、汚いぞ。まあ上がれ」

「いい、ここで」

「ん？」

「今日ね、告白されたの」

皆

三人には、全部話した。

三人をふと思い浮かべたこと。

大好きだった、って思ったこと。

それらを話してたらなぜか。

ふっと軽くなった気がした。

「えへへ。嬉しいなあ。僕もーちゃんすき」

そんな当たり前の会話がとても楽しかった。

「ありがと。あたしも」

ブチン。

「・・・ん」

起きるとそこは、自室。

時間は。

「時計止まってる・・・・・・・・」

わからなかった。

そっか、そういえば、勉強中に眠くなって・・・・・・・・。
クッションとひざ掛け毛布は、動かない。

「夢・・・・・・・・」

そつつぶやき、私はその三つを優しく撫でた。

「いい夢。」

皆（後書き）

強制終了すいません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7932r/>

うちの子変化

2011年10月3日11時20分発行